



Title	中国に留学する日本華僑・華人のアイデンティティに関する一考察-日本華僑であることの特殊性-
Author(s)	石川, 朝子
Citation	大阪大学教育学年報. 2008, 13, p. 81-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8384
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国に留学する日本華僑・華人の アイデンティティに関する一考察 —日本華僑であることの特殊性—

石 川 朝 子

【要旨】

本研究では、日本に在住する華僑・華人の留学経験者を対象とし、トランスナショナルな存在として捉えられるかれらのエスニック・アイデンティティの諸相をインタビュー調査を通して明らかにすることを目的とする。

「中国留学」を、これからも続くアイデンティティ形成過程の一部分であるととらえ、そこでみられたアイデンティティ形成のあり様をつぶさにみた。その中国留学経験においてアイデンティティ形成に影響を与える3つの要素を抽出した。それは、留学理由と日本・帰国華僑との比較、そして他の海外華僑との比較である。留学以前に持っていた漠然とした華僑アイデンティティや確固たる中国人アイデンティティが、留学経験によって、華僑アイデンティティがより明確化したり、日本華僑としてのアイデンティティを形成していくダイナミクスが明らかとなった。またそれらが、血統主義をとっている日本を生きる華僑としての特徴をもっていることがわかった。

1. はじめに

この研究の目的は、中国へ留学する華僑・華人⁽¹⁾の教育経験とエスニック・アイデンティティ⁽²⁾のあり様を明らかにしようとするものである。

昨今のグローバル化時代における海外華僑・華人に関する研究の課題には、移民と再出国、経済ネットワークと資本、統合、文化移転、社会・政治的動向、そしてその他関連する課題がある。それら海外の華僑・華人研究には、その国での彼らの生きる条件、立場、社会的役割、社会全体との関係、居住国と華僑・華人との関係から、中華アイデンティティの形成、その国での華僑・華人問題の解決のあり方の研究など、居住国を視点においた研究が多い。また居住国におけるアイデンティティ形成の研究は、グローバル化などの影響をうけ、日本でも1980年以降盛んに行われている。一方で、華文教育(華僑・華人への中華言語・文化等の教育)についての研究は多く行われているが、中華学校・華僑学校などの居住国における華文教育についての研究が中心である。さらに、そのほとんどは歴史的研究であり、教育経験とアイデンティティとの関係に着目した研究は少ない。

筆者は、日本における教育経験とアイデンティティとの関係について、神戸中華同文学校を卒業した華僑・華人の若者(第四世・五世)へインタビューを行った(石川 2006)。その一方で、彼らの居住国を離れ、かれらのルーツである中国へ留学する華僑・華人がいる。しかし、中国へ帰国する華僑(帰国華僑)に関する先行研究は大変少ない。かれらは、どのような経緯や目的で中国へと留学するのであろうか。留学先での教育経験やアイデンティティのあり様はどのようなものであろうか。本研究は、華僑・華人のルーツである中国に留学した華僑・華人に焦点を当て、言語・文化継承という側面からではなく、教育が彼らのアイデンティティ形成にどのような影響を及ぼすのかという観点から、中国における華僑・華人に対する教育経験に着目して考察しようとするものである。

本研究では華僑・華人のトランスナショナルなエスニック・アイデンティティのあり様を、中国への留学という教育経験を通して捉えようとするものである。また日本の華僑研究においても、教育とアイデンティティに関する研究はまだ始まったばかりであり、その関係がさらに詳細に解明される必要がある。今日のグローバル化において、華僑・華人の教育経験とエスニック・アイデンティティのあり様について考察することは、大きな意義をもつものといえよう。

2. 華僑のアイデンティティに関する先行研究

華僑のアイデンティティに関する先行研究として、まず斯波は、19世紀まで中国人や華僑はあまり「アイデンティティ問題」を重要視していなかったと指摘し、「中国とか中華とか華夏とかいう漢語が示すように、かれらは、世界の比類のない中心の文明の人々かその子孫であり、文明と華外との区別とその濃淡の幾重かの同心円のシステムの中核の人々だから、…海外の種族のちがう人々と比べながら自分に思いをいたすことを考えつかないのであっ」(斯波 1995 219頁)だが、1980年代には次第にアイデンティティに関することが話題になっていったという。しかしこの時点でも、過放は、「在日華僑のエスニック・アイデンティティに関する調査・研究はきわめて少なかった」(過放 1999 12頁)としている。

1980年以降、華僑のアイデンティティは「変容するもの」として位置づけはじめた。これは、華僑アイデンティティ研究に限ったことではなく、アイデンティティ研究の流れの一部として捉えることができるであろう。たとえば、華僑のアイデンティティ研究の代表者である過放は「在日華僑のアイデンティティには、彼らの生きた時代の相違による世代的特徴が見られる」(過放 1999 170頁)とし、変容趨勢を「在日華僑のアイデンティティの変換モデル」として示している。過放は、三世から五世の若い華僑を「重層的・多様型」とであると、かれらの国境を越えるアイデンティティの傾向全体を包括して、「トランスナショナル・アイデンティティ」と名付けている。そしてその内容は、まず①中国人アイデンティティ、②ダブル・アイデンティティ、③日本人アイデンティティ、④マージナル・マン、⑤トランスナショナル・アイデンティティである。

以上の先行研究は、しかし、彼らがそのようなアイデンティティを獲得する過程について明らかにしている研究は少ない。生まれながらにしてエスニック・アイデンティティを獲得するのではなく、社会的文脈や環境によって影響を受け変容していくものだという考えは、多くの研究者によって指摘されている。従って本研究では、華僑・華人の第三世代がどのようにして自己のエスニック・アイデンティティを形成していくのかに着目し考察を行う。また、その形成のプロセスの一部分として、中国への留学経験を取り上げ、その教育経験とアイデンティティ形成の関係について考察を行う。それは華僑・華人の居住国への現地化が指摘されてきた一方で、中国への回帰を志向する動きとも捉えられるものであり、日本華僑第三世代のアイデンティティ形成について考察される必要があるからである。日本の華僑研究においても、教育とアイデンティティに関する研究はまだ始まったばかりであり、その関係がさらに詳細に解明される必要があると思われる。

3. 分析の視点

本研究は次の2つの視点からアイデンティティ形成の過程を考察する。

第一に、エスニック・アイデンティティが社会的文脈によって影響を受け変容していくものだ、という観点から考察する。これは、先にも述べたように1980年代からのアイデンティティ研究の流れに追うところが大きい。本研究では華僑の中国留学経験を通して、それはたとえば留学生生活(例えば寮やクラス・部活)のなかで同じ背景をもつ友人との関係や、または中国で生まれ育った華僑や他の海外華僑との関係のなかで築き上げられる、相互作用的なエスニック・アイデンティティに注目している。加えて、彼らの生活環境なども参照し分析を試みることから、マクロな社会文化的枠組とミクロな相互作用的枠組との両視点をとり入れることになる。

第二に、集团的(group)なアイデンティティではなく、個人的(individual)なアイデンティティに着目する。本論文のエスニック・アイデンティティ研究としての視点は、個人的なアイデンティティがどのように形成されてきたのかを考察することにある。重要なのは個々人が今までの経験の中で、特に中国留学経験によってどのようにエスニック・アイデンティティを形成してきたのか、その個人レベルでのアイデンティティ形成過程をミクロに捉えることである。これは、「個人が周囲の人々との関わりの中で、自己の場を築きながら、日常実践の中で支配的言説をずらしていくような可能性をもつものであると考える」(山本 2002 19頁)。本研究では、このような視点を踏まえて、個人が教育的な経験を通して、揺れ動きな

がらも、自己のアイデンティティと向き合い、ダイナミックに形成していく、エスニック・アイデンティティについて着目する。これは、アイデンティティを固定的に捉えるのではなく、どのような作用によってそれが獲得されていくのかについて明らかにすることを目指すものである。

この第一と第二の視点を取り入れる理由をまとめると次のようになる。従来、世代の変遷や出自の違いによってエスニック・アイデンティティ形成過程に異なりがみられると言われてきたが、本研究では他者との関係性や相互作用性のなかで形作られるエスニック・アイデンティティのあり様に着目しようとするからである。

4. 調査の概要と分析

本研究では、中国へ留学した華僑第三世代の教育経験とアイデンティティ形成について明らかにするために、インタビュー調査を行った。インタビュー調査は、2006年9月中旬から10月半ばまでそれぞれ各1回、1時間から2時間にわたり行った。あらかじめ本研究の目的及びインタビュースケジュールを送付していた方もあり、インタビューは比較的スムーズに且つ内容的にも深く聴き取ることができた。インタビューは老華僑第三世代の3人を対象に行った。本調査での対象者が留学をした中国の大学⁽³⁾について、以下簡単に紹介する。一校が、北京華文学院(Aさん)で、もう一校が暨南大学(補習学校も含む)(Bさん・Cさん)である。

今回のインタビュー調査の目的は、中国での留学における教育経験などを通し、個人がどのように自己のエスニック・アイデンティティと向き合っていたのかを捉え、分析することにある。そのために、インタビューには留学の理由や中国でのエピソードなどの教育経験の一部分をライフストーリー形式で自由に語ってもらった。インタビューの主な質問項目は1. 中国留学理由、2. 気づき・経験・エピソード、3. 自己のエスニック・アイデンティティについて、の3点に焦点を当てて聴き取りを行った。インタビューの選定にあたっては、神戸華僑歴史博物館の館員の方々に協力を仰ぎ、神戸中華同文学学校卒業生3人を紹介してもらった。また、今回のインタビューは日本語で行った。インタビューのプロフィールは表1のとおりである。またインタビューは、インタビューの了承のもとすべて録音され、その後トランスクリプト化した。今回インタビューできたのは、男性3名であった。

(表1) インタビュープロフィール

	年齢	性別	居住地	国籍	世代	職業	学歴	留学先	留学期間
Aさん	32歳	男性	姫路	中国国籍	三世	教師	日本の大学卒	北京・北京華文学院	8ヶ月(1ヶ月・1ヶ月・半年)
Bさん	46歳	男性	神戸	中国国籍	三世	貿易関係	日本の大学夜間中退	広州・補習学校→暨南大学 華文学院	2年(1年・1年)
Cさん	47歳	男性	神戸	中国国籍	三世	会社員	中国の大学卒	広州・補習学校→暨南大学 本科	4.5年(半年・4年)

4. 1 Aさんの事例 「華僑人ですね。…マイノリティでありたい。とにかく」

Aさんは現在32歳で、日本生まれ日本育ちの華僑の三世である。「普通に、6歳から、同文学校で生徒として通って、小・中は通って、卒業してあとは普通のまっ、日本の高校、大学に行った」と自らの教育経験を語っている。「やっぱり、僕ら老華僑っていうのは、ね。しんどいことでもちょっと、我慢してやっていこう、ちょっとでも節約してお金貯めていこうっていう思想が家庭教育とか、…自分にとって影響あったと思います」と語るように、華僑の厳格な家庭に育った。これは、「うちの家庭教育が、一つ、わりと華僑の中でも厳格な方の一家に生まれ育っているんですよ」と語ることからも分かる。高校時代の教育経験のなかで、アイデンティティについて捉えている語りがあ

A：でもやっぱり、そこで、まわりの、あ高校入った時ぐらいやったらこう、周りが日本人ばかりじゃないですか、

I：そうですね

A：うん。んなかでやっぱり、うちの父親の代みたい、直接的な言動や、暴力や、受けた。僕らの時代では受けてないんですね。ただ、やっぱり、特に、実家が姫路やったんでね、神戸を離れて1人姫路におる、いうのはやっぱり、淋しさはありましたね。やっぱり、絶対的多数の人数がおる中で、なんで自分は…中国人なんやってね、親が中国人やから自分中国。そのころはやっぱり、中国人でいることがすごく嫌やったですね。

I：うーん。高校生くらいですか？

A：高校生くらいですね。んで、…ま、それがまず、最初の、中国人、日本人っていうのを意識したんが、そこでしたね。

これらの語りから、アイデンティティについて初めて意識したのは高校生の時であるということが分かる。では、その後Aさんのエスニック・アイデンティティはどのように変化していったのであろうか。以上のように、家庭教育や高校での教育経験がアイデンティティを規定する側面もあるであろうが、日本という文脈を離れた際に中国でどのようにアイデンティティと向き合ったのかについて見ていくことにする。

1. 留学理由

Aさんは、中国への留学を3回経験している。前の二つは、勤め先である中華学校からの研修制度を利用してのもので、働き始めて1年目と2年目に北京華文学院で研修留学をしている。後の一回は、5年前に同じ大学で半年間留学している。この半年の留学も学校の制度を利用したものである。Aさんは、どのような留学目的を持っていたのであろうか。以下に見ていくことにする。

「中国に留学したのは、えー…あのお〇〇学校に勤めはじめて、まだ一年目で、あのお、夏休みに校長から、その当時の校長から研修というかたちで、1ヶ月いかされたのが、えーまっ、留学とまではいかないですね、1ヶ月だから、研修ですよ。それを行かされたのが初めてです」と留学の理由を話した。Aさんが中国留学に行った理由というのは、上述の通り校長からの「命令」だったという。中学校三年生の時の中国での出来事が彼の中国観を形成しており、その後、働いてからも中国へ留学するのには否定的であったということである。留学の目的としては、

A：でも、〇〇学校、やっぱり、こう教員でもやっぱり、(華僑)三世・四世が増えてきて、教師の中でも教育、中国語に対するその力がね、弱くなってきているんで、学校の体制としては行かせたいというところがあるんだとおもうんですね。

というように、中華学校教師に華僑三世・四世が増えつつあるなか、中国語の力やその教育力を高めることを学校側は目的として掲げ、中国研修留学または中国留学などの制度を整えているものと思われる。前者は毎年5～6人でチームを組み、夏休みを使用して行われている。

2. 気づき・経験・エピソード

ここでは、中国留学中に経験したいくつかのエピソードを挙げ、自分のアイデンティティと向き合っている様子を描くことを試みたい。Aさんが「華僑人。…マイノリティでありたい。とにかく」と当時をふりかえり、また今の自分と重ね合わせて言うとき、その中国留学時代にどのような出来事があったのであろうか。

A：ただでも、…ショック受けたんわ、その、ばくが学校のグラウンドでこう遊んでるときにね、ちっちゃい子ども、小学校低学年くらいのちゃきちゃきした、北京の下町の女の子がね、そんな子が、あのお、どっからきたんやって。「日本来的」「日本鬼子」(笑)今でもそんな言われるんやって。「日本鬼子」ショック受けましたね。

I：そんなときどう言わはったんですか？

A：「日本人ちゃう(ちがう)」って。

というエピソードがある。これは、大学構内のグラウンドで遊んでいるとき、1人の中国人の女の子に出身を聴かれ、「日本からきた」というと、日本人を罵る言葉をかけられたというものである。このとき、Aさんは「日本人ではない」と言って、自分の日本人としてのアイデンティティを否定している。日本人であるとはそれまでも思っていない。また、このようなエピソードが語られた。

A：そのお店屋さんいったときもそうですしね、「なんで、日本に住んどー(住んでいる)のに日本人じゃないねん」。そんなこといわれたり。

2つのエピソードが示しているのは、日本という出身が彼のアイデンティティを外部から規定しようとしていることである。日本ではなく、中国でこの経験をしている。このような経験を通して、彼のアイデンティティが強化され、その形成に影響を及ぼしている可能性は高いといえよう。

3. エスニック・アイデンティティについて

Aさんが、中国への留学を通して自分のエスニック・アイデンティティをみつめ、「華僑人」「マイノリティでありたい」と自分を位置づけている様子は2つのインタビューから伺える。

A：でも自分は日本の中では、自分が意識しないと、中国人ではいれないわけです。だから、周りの人間は日本に流されて行っているなかで、自分は、日本で、思想の面で、ぐっと張っていかないと中国人ではいられない。でも、そういう気持ちを中国人に伝えたとこで、中国人分かってくれない。多くの人は。なんで、日本に住んどーのに日本国籍とらないの？

A：僕は何国人かいわれたら、日本人かっていわれたら絶対日本人ではない。中国人かっていわれたら、中国行って中国人って認めてくれないから。中国人ではない。だからいうたら、やっぱ、華僑ですね。華僑人。やとおもうんです。でもこの立場すごい、重要やと思うんですよ。…客観的に見れる。…その、絶対的多数じゃなくて、マイノリティの立場としておれるっていうのは。…ばくはマイノリティでありつづけたい、うん。少数でありつづけたい。やっぱりそういう意識は留学行ったときからかな？生まれましたね。両国の気持ちがわかるマイノリティでありたい。とにかく。

これまで見てきたように、Aさんは自分のアイデンティティと向き合うことを中国留学を通して経験し、また自分のエスニック・アイデンティティを意識したのは、「そういう意識は留学行ったときからかな？」という。

Aさんは自分を、日本人でもない、中国人でもない、華僑人であると位置づけている。またそのようなどちらの国や文化にも属さない立場をポジティブにとらえ、「両国の気持ちがわかるマイノリティでありたい。とにかく」と語った。このようなアイデンティティの形成には、留学生活中に会った中国人の女の子や現地の中国人との関係や彼に向けられた言葉などが大きな要因として考えられる。

4. 2 Bさんの事例 「華僑…っていうのはほんとの中国人でもないのかなっ。…やっぱり、中国人ですね」

Bさんは現在、46歳の男性で、華僑の三世である。貿易業を営んでいる。中国留学までの教育経験はというと、華僑幼稚園を卒業し、その後神戸中華同文学校に小中学校と9年間通った。卒業後、日本の高校へと進学することになる。家庭環境は、大阪の領事館に知り合いがいたり、姉がアメリカへ留学していたり、中国の上海に父親の同級生がいたり華僑ネットワークを世界的に広くもつ家庭であった。そんなBさんの家庭内では日本語を共通言語としていた。

以下、Bさんの中国留学の理由やエピソード、またエスニック・アイデンティティのあり様についてインタビューからみていくことにする。

1. 留学理由

20歳のころ、国立大学の夜間部に通い機械関係の勉強をしていたBさんは、2年ほど通った後、中国へと留学することになる。その理由をBさんは「やっぱりいいこの夜間の方がいいっていう感じで、行ってたんですけど、やっぱり続かなかったというのが現状なんですけどね」と語る。そのような気持ちと知り合いの領事館が中国留学を勧めたという機会が重なり、アメリカ行きも当初考えたが中国の福建省に行くことになった。また留学の理由も、「中国ではその時点では、まだ帰ったことがなかったし」、「だからま、ちょっと見に行ってみるっていう」気持ちを持っていたようだ。

2. 気づき・経験・エピソード

Bさんは、中国・日本という対比を通して、中国留学中に多くの気づきをしている。その様子を2つのインタビューから捉えてみたい。

B：そうですね。中国に行って得たものっていうのはやっぱり、向こうの感覚と日本の感覚とこちらの華僑の感覚と、僕らが中国の、ね、あの、華僑の学校とかで学んできたことで、習慣とかいろいろ教えてもらったとかね。…思ってた感覚と違うと。

B：現地の方の人をもらってこっちに連れてきてるんですけども、でもあの、ずっと言われているのが、ね、同じ華僑、中国人やと思ってても、本人に対して同じ中国人やと思ってても、そうじゃないと。それは、留学した時からね。

これらの語りからは、中国での留学経験から、中国人・日本人を比較して、華僑とは何かを自らに問いかけている様子がうかがえる。同時に、神戸中華同文学校で教えられていた中国と現地で感じた中国とのズレや、華僑・中国人という以前から持っていた感覚が中国留学中に違ったものへと変容する様子が伺えよう。

3. エスニック・アイデンティティについて

Bさんのインタビューでは、自らのアイデンティティについて現在→留学時代→現在→過去という時系列で話された。このことは、過去の中国留学経験が現在、過去とどのように関係しているかを知る意味で興味深い。以下、その語りを引用し、Bさんのエスニック・アイデンティティのあり様に迫ることにする。

B：でも根本的にやっぱり海外に行くっていうのは、やっぱり向こうの人も対人上で違いがあるなっていうね。やっぱりそういう面で華人、華僑っていいですけど、華僑…っていうのはほんとの中国人でもないのかなっていう気はしますね。留学してて…そのお。当時はそう思いましたね。

B：やっぱり、中国人ですね。

I：中国人。うん。いつ頃からですか？それは。

B：ずっとですね。僕の場合は。

B：僕もとから、Bっていう名前（中国名）が、ね、日本で小さいときからね、日本の学校いってますから。もう、すぐに分かるじゃないですか。

エスニック・アイデンティティを振り返って語られたこれらの内容は、実に複雑であることがわかる。過去においては、名前が中国名であることで外部から「中国人」と規定されていた事実が、「やっぱり中国人ですね」というエスニック・アイデンティティを導いている。しかし、「華僑…っていうのはほんとの中国人でもないのかなっていう気はしますね。留学してて」と語るように、中国での留学を通してそのアイデンティティが若干変化していることが伺えよう。

これまで見てきたように、Bさんは中国留学を通して自分のアイデンティティと向き合う経験をしている。Bさんは自分を、「やっぱり、中国人ですね」とする一方、「華僑…っていうのはほんとの中国人でもないのかな」とその複雑な心境を語っている。このことから、留学以前に持っていた中国人アイデンティティが中国留学の経験によって揺ぎをみせる様子を知ることができるであろう。このようなBさんのアイデンティティの形成には、中日の生活や習慣などの比べる経験が大きく作用している。

4. 3 Cさんの事例 「俺は中国人…やねんけど、外国人やねんなあ」

Cさんは神戸市在住の華僑三世で、年齢は47歳の男性である。インタビューをした3人のなかで、最も中国留学の滞在年数が長く4.5年で、中国で大学を卒業した唯一の人物である。19歳の時に中国へ渡り、広州の補習学校で半年勉強したあと、暨南大学の4年生本科へ入学した。家庭環境はというと、神戸のみならず全国の華僑と親交が深い。東京、横浜などにも華僑の有力者とのネットワークを持っている。家庭内の共通言語は日本語である。教育経験としては、神戸中華同文学校で小学校、中学校を過ごし、卒業後は日本の高校に進学した。高校卒業後一年間は、「（日本の大学に進もうかどうか）考えてたうか、ぶらぶらしてたんですけどね」とふりかえる。このようなCさんの留学目的、留学先での体験やエピソード、そして留学中にみられるアイデンティティのあり様などはどのようなであろうか。以下、インタビューの語りからみていくことにする。

1. 留学理由

中国への留学理由は、周りの人の勧めであったと語る。しかも、「きっかけゆうのがね、…ちょっといろいろあって、…無理矢理行かされた、みたいな感じですね。僕は。…うちの家っていうのが、ま、いろいろ関係があって」と、その親戚などの関係で無理矢理行かされたと言う。その時の政治的背景についてもこう語る。

あの、僕が高校卒業して一年間、ま、浪人みたいなんしてて、ぶらぶらしてて。で、一年経ったくらいのとときに、でちょうどそのときに、暨南大学が文革（文化大革命）の時に停止になってて、ちょうど78年に復興したんですわ。…で、復興して一年目で、海外華僑っていうのが（大学側は）欲しい時期だったんで。で、ちょうど香港・マカオからは来てたけど、海外華僑からはあんまり来てないと

というように、Cさんが中国へ留学を勧められたころ、ちょうど中国では文化大革命が終焉を迎え、華僑

のための大学が復興し始めた年であった。日本の華僑総会はその華僑のための大学を経済的に支援した。海外華僑が大学にまだまだ少ないということで、関西の華僑の中から名前を挙げられたのがCさんであった。そのときのことをCさんは率直に「向こうはすごいええとこやってね、南国で、ご飯も美味しいとかね。いろんな話を聴いて、でとりあえず、ほんなら半年くらいでも行こっかな?と。ま、1年日本でぶらぶらしててもおもしろいから。というので、行ったのがきっかけですね」と語った。

2. 気づき・経験・エピソード

仲の良かった友だちは三人いて、一人が当時30歳で、文化大革命の際に農村に追いやられて戻ってきた華僑、もう一人が28歳の元解放軍でその後共産党員になった華僑であった。それと横浜から同時期に同じ暨南大学に留学をした日本華僑との4人で仲良くしていたようだ。その時友だち同士で話し合ったことについて、以下のように話している。

C：だから、結局はくら同じ華僑やけども、華僑やけども、むこうしたら華僑とは思わない。外国人っていう。外国人っていうかたちに捉えちゃうからね。

I：むこうから見れば。

C：そうそうそう。そのあと、最初はやっぱりいろいろ壁があったけれども、結局大学一緒にいて、同じ寮におって生活してて、仲良くなってくると、やっぱりいろんな本音が聴けるっていう話し。

仲の良い年の離れた華僑の友人との交流のなかで、同じ華僑として大学に通っていても、Cさんは海外からの華僑と位置づけられ、華僑としてではなく外国人として捉えられた経験を語っている。しかし、この関係は「学生やからね。学生と一緒に学校にいるっていうかたちやから、…一年目より二年目、二年目より三年目四年目になると、そういうのはあまり無くなってくるからね」というように、中国での留学期間が長くなればなるほど、このような経験をしなくなるという。

3. エスニック・アイデンティティについて

中国留学が、自分のなかの「国」や「民族」という概念に影響を与えたかどうか、について尋ねたときCさんはこのように話した。

C：ほれはね、すごい難しいと思うね。…そのお、自分等がこう華僑で、国が中国っていう場合ね、海外では思えるけども、日本にいたら思えるけども、逆に現地に、中国にいたら自分は外国人っていう意識がでちゃうからね。

I：それはどういった面ですか？金銭的な？

C：いやっ金銭的な面は勿論そうなんやけど、現地の人がそう思っちゃうからね。…どうしても。海外に住んでる人間っていう、イコール外国人っていう風に考えるから。

I：自己紹介の時とか、例えばどうされてましたか？覚えてらっしゃらないかもしれないけど。日本から来ましたとか。

C：そうそうそう。日本華僑ですゆうて。

この語りからは、日本からの海外華僑は、日本国内では中国を祖国として感じる一方、現地にいくと自／他共に外国人と位置づける／られていることがわかる。そしてそのことは、パスポートの話しにまで及び、日本の国籍法が他国の法律とは異なっていることによる他国華僑との差異を次のように語っていく。「だから日本華僑っていうのはすごい微妙な立場なんやね。海外の華僑とはちょっとちがうよね。だからそれは痛切に感じたよね」と語る。このことは、日本の血統主義と海外の地生主義という国籍法による区分が浮かび上がる。

日本におったときは、中国人、中国人っていうぐあいに、日本人じゃないと教えられてたし、ま自分も中国人やって考えてたけども、向こうに行ってたときに、こう、みんなと話するとき、あ、お前は外国人という具合に向こうから思われる。俺は中国人…やねんけど、外国人やねんなあっていう考え。

日本で生まれて、教えられてきたことが中国留学経験を通して、違った側面から捉え直されている。それは、現地の中国人や華僑の仲間からの位置づけと自分で持っていた「〇〇人観」が異なっているということを感じた、または感じさせられている。インタビューの最後にCさんは、個人ではなく日本の華僑の立場というものをこのようにまとめている。

C：国際人っていうのが、さっき僕が言うた、その華僑の、日本華僑の中途半端な立場でしょうね。日本人でもない、中国人でもない。中途半端な。中途半端っていうたらへんな言い方やけど。

I：はい。

C：まんなかに立った、微妙な立場。

これまで見てきたように、Cさんは中国留学を通して多くの人と出会っている。その中でも中国で出会った四人の友だちと話した内容は印象的である。それは、「だから、結局はくらく同じ華僑やけども、華僑やけども、むこうにしたら華僑とは思わない。外国人っていう。外国人っていうかたちで捉えちゃうからね」という他者からの規定であって、また留学まで持っていた自分のアイデンティティと向き合う経験になっている。

Cさんは自分を、「俺は中国人…やねんけど、外国人やねんなあ」と位置づけている。このようなアイデンティティを持ったのも、海外留学中に会った人びとからのまなざしが影響していると思われる。

またCさんは日本華僑の特性を国籍制度の面から捉えている。「日本華僑ということは、ほな日本人っ、というふうに考えとるからね。日本人には、ただ、中国パスポート持ってるって、じゃ、なんで中国パスポート持ってんねんっ」と中国留学先で言われたことから、日本華僑の特性について考えることになったのである。Cさんの場合、このように人との出会いや制度的な要因を考えることによって、自分のアイデンティティを形成していく様子が理解できよう。

5. 考察

では、これら三人のエスニック・アイデンティティ形成に影響を与えている要素は何であろうか。以下、三人の語りに共通してみられるアイデンティティ形成に影響を与える要素を三つに整理する。1)中国留学理由、2)生活・環境の比較作業、3)人との出会い・他者からの位置づけ、である。それぞれについて本研究の視点である、エスニック・アイデンティティ形成の相互作用性・他者性と関連付けてみていこう。

1) 中国留学理由

三人のインタビューにおける中国留学理由に着目してみると、共通点がみられる。それは、それぞれが自分の意志で中国留学を志望したのではないということである。Aさんは「初めて研修に行くときも、本当は嫌だったんです」と語り、「でも（校長からの）命令だからね、行きなさいって言われたから」とその留学理由を答えている。同様にBさんは、領事館の知り合いから留学を勧められて中国に行くことを決めている。Cさんにいっては、「きっかけっていうのがね、…ちょっといろいろあって、…無理矢理行かされた、みたいな感じですね」と語り、自分の意志による中国留学ではないことがわかる。

このように外部からの中国留学の勧めを契機として、留学以前に持っていた華僑アイデンティティや中国人アイデンティティを再確認していることが伺える。それは、Bさんの「中国ではその時点では、まだ帰ったことがなかったし、…だからま、ちょっと見に行ってみる」という語りや、文革が終わり暨南大学に海外華僑の人数を確保したいという歴史的・政治的意図から選出されたCさんの立場からもわかる。これらのルーツである中国への留学が、自らのエスニック・アイデンティティを再確認する契機となってい

るのである。

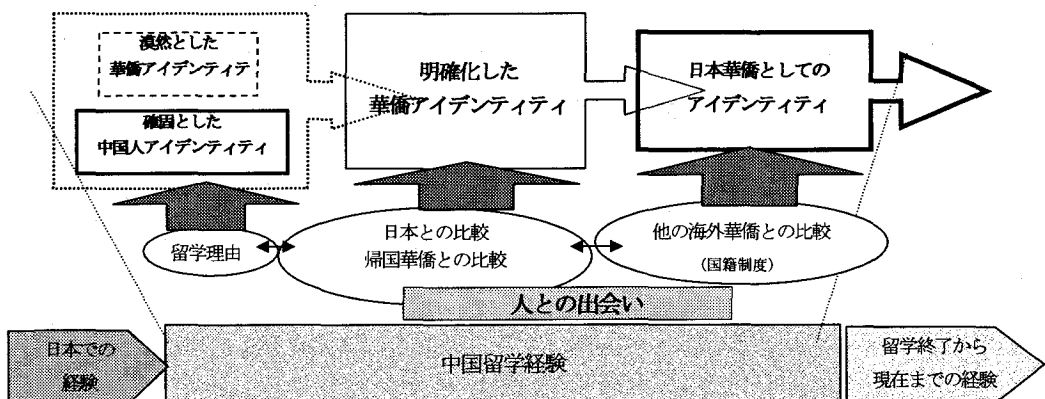
2) 生活・環境の比較作業

そして中国での留学生活が始まるが、その日々の中でかれらは日本と中国という環境の違いなどを比較していく。その中日の比較作業が、エスニック・アイデンティティに揺らぎをもたらしている。たとえば、Bさんは上海の空港で「日本の感覚と全然違うから、もう、すぐにでも飛行機に乗って帰りたい」や「神戸で僕らが習った時の言葉って、…完全に…日本語的な中国語になった」など日本での生活や言語面での違いを語っている。またその違いを感じることによって、以前の〇〇人観が揺らぐ様子は、留学生活で得たものについて尋ねたときの「僕らがこちらで日本の伝統はこやと、中国の伝統はこやと、思ってたのと、それが華僑が思ってたのと、実際向こうでっていうのはまた違うのかなと」いうBさんの語りからも明らかである。Cさんは留学生活について「そりゃやっぱり、生活が全然違うから。でも1ヶ月、2ヶ月経てば全然、大丈夫やったんで」と比較している。勉強面では留学中に使っていた教材に関してBさんが「全く（日本の教材と）違います」と答えたり、生活の細部にわたって中国と日本を比べている様子が見えてくる。

3) 人との出会い・他者からの位置づけ

三人の留学経験とアイデンティティ形成に関して共通していることは、人との出会いによって、自らのエスニック・アイデンティティに向き合う経験をしていることである。その出会いは、主に現地中国人であり、大学で一緒に学ぶ帰国華僑であり、そして同じ背景を持つ海外華僑との出会いである。たとえば、Aさんは日本から来たことを告げた際、現地の女の子から「日本鬼子」という言葉をかけられ、ショックを受け「私は日本人ではない」と答えている。また店に入ったときに中国人から「なんで、日本に住んどのに日本人じゃないねん」と言われ、彼の、中国人でもない、日本人でもない、華僑であるというアイデンティティを強化している。Cさんは、中国留学中に得た帰国華僑の友人との会話のなかで、エスニック・アイデンティティに向き合う経験をしている。「だから、結局僕ら同じ華僑やけども、むこうにしたら華僑とは思わない。外国人っていう。外国人っていうかたちには捉えちゃうからね」と、華僑ではなく外国人というふうには捉えられる経験をしている。また部活での先生と出会い、体育の実力を見いだされ、広州での大会で優勝したときのことを語る部分では、「そこで、優勝しちゃって。新聞沙汰になって。いろいろやっぱり、海外から来たっていうのがあってね」と、自分が新聞に載ったのは海外華僑であるからだと捉えている。このように、中国留学を通して出会った人びとが、かれらのアイデンティティ形成に影響を与えている様子が見えてくる。

以上の中国留学経験における3つの要素とアイデンティティ形成のあり様の関連性を示したのが図1である。



(図1) 中国留学経験とアイデンティティ形成の連関図

これが示しているのは、まず中国留学経験というものが、過去・現在・未来の流れの中の一部であるということである。今回は、これからも続くアイデンティティ形成過程の一部である「中国留学」の期間を切り取り、そこでみられたアイデンティティ形成のあり様をみた。その中国留学経験においてアイデンティティ形成に影響を与える3つの要素を楕円で示している。それは、留学理由と日本・帰国華僑との比較、そして他の海外華僑との比較である。そしてそれらの影響により、かれらのエスニック・アイデンティティ形成に変化が見られることを一番上の四角で表した。これらは、留学以前に持っていた漠然とした華僑アイデンティティや確固たる中国人アイデンティティが、留学経験によって、華僑アイデンティティがより明確化したり、日本華僑としてのアイデンティティを形成していく様子を図示したものである。図1は、留学以前に持っていたアイデンティティが、中国への留学経験によって、弱められたり、強化されたりして、現在のエスニック・アイデンティティを形成するのに影響を与えた経験とアイデンティティ形成の連関を表している。

6. 日本華僑であることの意味

本研究では中国へと留学する日本の華僑が、自己のエスニック・アイデンティティを留学という教育経験を通して、日本華僑としてのアイデンティティが強められるという結果がみられた。エスニック・アイデンティティを語るとき、日本人でもない、中国人でもない、日本華僑であると彼らが語るということは、どのような意味を表わしているのだろうか。

たとえば、日本華僑がアメリカへ留学したとする。そこで、出自を聞かれたとき、日本人、中国人、日本から来た(生まれの)中国人、もしくはjapanese-chinese, chinese-japaneseと答えることができよう。ここには、自分でエスニック・アイデンティティを決定できる余地がまだ残されている。しかし、中国へと渡った華僑たちは、現地の中国人や他国の華僑との間で中国人であるのか、日本人であるのかという二者の選択を迫られることになる。これは、他国の華僑とは違い、彼らが日本という血統主義⁽⁴⁾の国で生まれたため国籍が中国であることが背景にある。他者からのこのような問いかけにより自己と向き合った結果、彼らの日本華僑としてエスニック・アイデンティティが強化されていくことになる。それらは次の語りからも明らかである。

- A: 僕は何国人かいわれたら、日本人かっていわれたら絶対日本人ではない。中国人かっていわれたら、中国行って中国人って認めてくれないから。中国人ではない。だからいうたら、やっぱ、華僑ですね。華僑人。
- B: でも根本的にやっぱり海外に行くっていうのは、やっぱり向こうの人も対人上で違いがあるなっていうね。やっぱりそういう面で華人、華僑っていいですけど、華僑…っていうのはほんとの中国人でもないのかなっていう気はしますね。留学してて…そのお。当時はそう思いましたね。
- C: 国際人っていうのが、さっき僕が言うた、その華僑の、日本華僑の中途半端な立場でしょうね。日本人でもない、中国人でもない。中途半端な。中途半端っていうたらへんな言い方やけど。

これら三人の事例はまさに、中国へ留学したことによって、中国人でもない、日本人でもない、日本華僑としての強いエスニック・アイデンティティを有していく過程とみることができよう。ここに、日本華僑がもっている特殊性があるといえる。このことは中国への留学経験によって、社会文化的にエスニック・アイデンティティが規定されることを示している。先の例を挙げたように、日本華僑としてのエスニック・アイデンティティはアメリカなど中国以外の国では選択の一つとして用意されるものの、中国では日本華僑というアイデンティティがより強化されることになる。このことは、中国への留学経験以前に有していたそれぞれのアイデンティティ観が、他の海外華僑と中国で出会うことにより、その視野が広がって行く様子を描いているといえよう。また、日本華僑という存在自体の捉え方にも変化が見られることが分かった。

本研究では、華僑第三世代のエスニック・アイデンティティ形成のあり様を、中国留学という経験を通して考察した。それは、一枚岩的でない、揺れ動くアイデンティティ形成のあり様であった。そこでは、漠然とした華僑アイデンティティや確固たる中国人アイデンティティを持っていた日本華僑が、中国への留学経験によって、華僑アイデンティティをより明確化させたり、日本華僑としてのアイデンティティを形成していく過程が伺えた。本研究では、留学以前に持っていたアイデンティティが、弱められたり、強化されたりして、現在のエスニック・アイデンティティを形成するのに影響を与えている留学経験における3つの要素を抽出した。

エスニック・アイデンティティの形成は、過去・現在・未来へと続くなかで長期的に行われるものである。今回の研究は、これから続く長い過程の一部である「中国留学」の期間を取り上げ、そこでみられたアイデンティティ形成のあり様をみてきた。この中国留学という期間に見られる様々なアイデンティティ形成のあり様を捉えることは、トランスナショナルなアイデンティティがいかに形成されてきたのかについて見る上で意義を持つものかといえよう。

最後に、本研究の今後の課題として以下の2点を挙げておきたい。一点目は、中国留学経験というものの中で、中国におけるカリキュラムやそこで行われるプログラムについてインタビューできていないということである。中国政府が意図的に設立している華僑のための大学で行われているカリキュラムやプログラムが、アイデンティティ形成にどのような影響を与えるのか（または与えないのか）については興味深い。二点目は、三人に対してのインタビューが留学から20年あまりの歳月を経てからとなったということである。過去を振り返る際には、現在置かれている環境が語りに多分に反映されることも考えられる。よって、今を捉えるためには、華僑のための大学で現在学んでいる海外華僑へのインタビューが必要であろう。

これらの課題のために、2007年2月末より、大阪大学大学院生海外短期留学助成を得て調査を行った。調査を行ったのは、暨南大学という中国・広州にある華僑・華人のための大学である。調査の内容は、現在大学が華僑に提供しているカリキュラムについて、また大学で彼らは何を学び、感じているのかについてである。その調査結果は次稿に譲りたい。

【注】

- (1) 「華僑・華人」、「新華僑・老華僑」、「在日中国人」の定義はつぎの通りである。「華僑」とは、「海外に仮住まいする中国人」のことをさす。中国国籍を保有し居住している人達のことである。日本における華僑のほとんどは、東京・長崎・神戸・大阪・横浜・函館のような旧開港場に集住しており、伝統的な商業社会を形成している。英語ではOverseas Chinese又はChinese overseasが一般的に使用される。一方、「華人」とは海外居住国の国籍を取得している人達のことである。英語ではEthnic Chineseと呼ばれる。(可児 2002)
- (2) 本発表の中心的テーマであるエスニック・アイデンティティの定義はエドワード (Edward) のものを援用することにする。エドワード (Edward, 1979) は、

エスニック・アイデンティティとはつまり、一その集団が大きくとも小さくとも、社会的に優勢であるとか、下位に属しているとか、いずれにせよ一先祖の繋がりをもつ集団への忠誠である。同じように社会化されたり、文化的パターンをもちつつ、何世代にもわたって続くことは必要ではないが、集団境界感¹は固執しなければならない。エスニック・アイデンティティは、共有された客観的な特徴(言語、宗教など)もしくは、より主観的な集団性 (groupness)²、もしくは両方の組み合わせによって維持されるに違いない。(筆者傍点)

と定義する。ここで重要なことは、エスニック・アイデンティティが客観的な特徴や主観的な見方だけでなく、その両方を組み合わせることによって維持されるものだと定義していることであろう。(Mary Fong 2004 5頁)

- (3) 北京華文学院は、中国國務院僑務辦公室的直屬校である。1950年に、海外華僑、華人と外国籍學生が中国言語と文化を学ぶため、そして海外の文化との交流と友好往來の目的のため建てられた。これまでに、54カ国・地域から5万余名の海外學生がここで学んでいる。「海外華僑華人に祖國の言語と文化を伝える」という目的を有している。1981年から1990年まで、32カ国・地域から969名が漢語長期班の學生として、海外華文教師育成班で

477名が、世界各地から汉语短期班で学ぶ生徒は2800名に及んでいる。(北京華文学院 HP: <http://www.bjhwxy.com/> 2006年10月参照)。

暨南大学は1906年に創立し、中華人民共和國國務院僑務事務委員会及び教育部に直屬している総合大学で、中国が21世紀に向けて力を注いでいる100の大学の1つである。現在、全日制在籍者は23752人、その内、華僑、香港、マカオ、台湾及び外国からの学生は10609人に達し、中国国内において一位を占めている。暨南大学は“華僑の最高学府”といわれ、長い間、国語教育と外国人向け中国語教育に力を入れている。(暨南大学HP: <http://hwy.jnu.edu.cn/zhaosheng/duiwai/index03.htm> 2006年10月参照)。

- (4) 1985年の国籍法改正により、婚姻した男女のどちらかが日本人の場合、生まれてくる子どもには日本国籍の取得が認められるようになった。今回インタビューをしたAさん、Bさん、Cさん、共にこの国籍法の改正以前に生まれているため、中国国籍を保有している。

《引用・参考文献》

- Anya P. Royce, 1982, 'Neither Christian nor Jewish' Ethnic Identity, Strategies of Diversity, Indiana University Press, Bloomington, pp. 17-33. アニヤ P. ロイス1996 第5章 「キリスト教徒でもユダヤ教徒でもなく」 p 191, 『「エスニック」とは何か』 青柳まちこ編 新泉社
北京華文学院 HP: <http://www.bjhwxy.com/>
陳天璽 2001 『華人ディアスポラ』 明石書店 p. 117
市川信愛 1987 『華僑社会経済論序説』 九州出版会
石川朝子 「日本華僑・華人のアイデンティティ形成に関する一考察—アイデンティティ形成と他者との関係に焦点をあてて」 大阪大学教育学年報 第11号 2006年 pp 141-153
暨南大学 HP: <http://hwy.jnu.edu.cn/zhaosheng/duiwai/index03.htm>
徐照彦 2003 「華人経済研究の課題と方法」 游仲勲先生古希記念論文集編集委員会編 『日本における華僑華人研究』 風響社 p. 14
L. Ling-chi Wang 1991 "Roots and the Changing Identity of the Chinese in the United States" P 185-212. Tu Wei-ming ed. The Living Tree-The Changing Meaning of Being Chinese Today Stanford Iniversity Press
Leo Driedger 2003 Race and Ethnicity. Oxford University Press
過放 1999 『在日華僑のアイデンティティの変容』 東信堂 p 12
可見明弘ら編著2002 『華僑・華人事典』 弘文堂 p 267-268
小柳志津 2006 『感情心理学からの文化接触研究』 風間書房 p 238-245
山本須美子著 2002 『文化境界とアイデンティティ』 九州大学出版会
Wsevolod W. Isajiw, 1974, Definitions of Ethnicity, Ethnicity, vol. 1. no. 2. pp. 111-124 セボルド W. イサジフ第二章 「さまざまなエスニシティ定義」 青柳まちこ編 『「エスニック」とは何か』 新泉社 1996 p 77~

(中国文献・書籍)

- 李盈慧, 1997, 民國史學叢書4 『華僑政策與海外民族主義: 1912~1949』, 國史館。

How is Identity Established Through Educational Experience? —An Analysis of Overseas Chinese Returning to China—

ISHIKAWA Tomoko

In this study, I intend to examine the educational experiences of the Chinese nationals, who were born in Japan. It is conducted by using interview and questionnaire methods. Moreover, I intend to clarify the diverse aspects of their ethnic identity that are affected because they are regarded as trans nationals.

Based on the analysis, I identified the following three factors that influence the identity formation of overseas Chinese in Japan who return to China: (1) their reason for returning to China, (2) their comparison of themselves with overseas Chinese in other countries, and (3) their comparison of the differences in their life style and culture with that of those residing in other countries, particularly with regard to "nationality". At the same time, based on these three factors, it can be demonstrated as to how identity is established through educational experience in China while they are going abroad. This fact also represents a change in their identity from Chinese to overseas Chinese in Japan. On the other hand, it also suggests a transition from an earlier ambiguous identity as overseas Chinese in Japan to that of a strong one.

This identity crisis is supposed to be a unique characteristic of overseas Chinese in Japan. Before the National Law was revised in 1985, a Chinese individual born in Japan was automatically awarded Chinese nationality. All the interviewees are Chinese nationals. When they leave Japan to travel abroad, they are not regarded as Japanese. This type of identity crisis does not occur in other countries, for example, America. Identity is established based on the social environment.